

論文の要旨

論文題目	在日ブラジル人児童の日本語受身・使役表現の理解と産出に関する実証的研究 日本人幼児・児童との比較を通して
氏名	田口 香奈恵
学位	博士(文学)
授与年月日	平成19年6月29日

外国人年少者の日本語教育カリキュラムを考えていく上で、日常会話などで比較的早く自然習得していく文法項目となかなか身につけにくい文法項目を見極めていくことは非常に重要だと思われる。これまでの外国人年少者の習得研究では、受身・使役表現に焦点を当てているものはほとんどない。受身・使役表現は、日本語を第一言語とする日本人の子ども達にとっても、習得が遅れるとされる文法項目である。そのため、滞日期間が短い子どもを対象としてきたことによって、受身・使役表現の習得を確認するまでに至らなかったのではないかと思われる。また、これらの表現は回避行動が多く、観察しにくい文法項目であるため、外国人年少者の習得研究では受身・使役表現が取り上げられなかったとも考えられる。しかし、小学校での学校生活や学習科目の教科書等を見ても受身・使役はしばしば用いられており、その理解・産出は重要であると考えられる。

そこで、本稿は外国人年少者が、友達や先生との会話、教科指導等を通して、どのように日本語の受身・使役表現を理解・産出していくか明らかにする。さらに、日本語を第一言語とする子ども達の発達段階と比較し、その習得の類似点、相違点を明らかにすることを目的とする。

第1章では、問題の所在、研究の意義、研究目的について述べた。まず、近年の在日外国人年少者増加によって生じた問題や課題に触れ、研究の意義を示した。そして、予備調査として、自然場面での発話収集調査と条件下での発話収集調査を行い、本稿の調査方法の立場を決定するまでの過程を述べた。さらに、外国人年少者の周りでどのような受身表現や使役表現が学習され、使われているかを探るため、子ども向けの日本語指導テキスト、小学校で使用されている教科書学習用教科書、教師や日本人の発話についてまとめた。最後に本稿の目的、構成を述べた。

第2章では、日本語の受身・使役表現の習得に関する先行研究を概観した。日本語の受身・使役表現の文法的側面について概観した後、受身・使役表現の習得研究を調査対象者別に、日本語を第一言語とする子ども、日本語を第二言語とする子ども、そして成

人日本語学習者に関してまとめた。日本語を第二言語とする子どもについては、バイリンガルの言語習得と教育の視点から、子ども達の言語習得がどのように進むのか、教科学習にどのような影響を与えるのかに関して論じた。

第3章では日本人の子ども達が受身表現、使役表現の理解・産出がどれくらいできているのかその実態を探るために、公立小学校に通う日本人児童と、その小学校に隣接する幼稚園児たちを対象に横断的調査を行った。調査方法は「提示された絵カードを見ながら、絵の内容についての質問に答える」という実験的手法である。その結果、日本人の子ども達は親子間や日常生活でよく使われている受身・使役表現から理解・産出されることが明らかになった。小学校3年生の子ども達は受身・使役表現の産出が可能であったのに対し、幼稚園児らは受身の理解、受身・使役表現の産出は不安定で未だ習得過程にあることが明らかになった。

第4章では、第3章の日本人児童と同じ公立小学校に通う2名のブラジル人児童を対象に、約2年にわたる縦断的調査研究を行った。第3章と同様の絵カードによる調査を行い、受身・使役表現の理解と産出がどのようなプロセスで進むのかを調査した。その結果、ブラジル人児童らは、受身・使役表現ができたりできなかったりという不安定な時期を経て、活用としてではなく表現のかたまりとして受身・使役表現を理解・産出していった。特に、子どもの日常会話に密着した表現が習得されやすいということがわかった。習得されやすい受身・使役表現は同じ課題を用いた第3章の日本人幼児・児童とほぼ同様の結果となった。

第5章では、より滞日期間の長いブラジル人児童らを含めた55人を対象に横断的調査を行った。調査方法は「提示された絵を見て、その内容に合うよう文を完成させる」という課題文完成筆記テストを用いた。ブラジル人児童と比較するため、小学1年生から3年生までの日本人児童283人にもブラジル人児童と同様の調査を行った。その結果、滞日期間2年未満のブラジル人児童は筆記において受身・使役表現は産出されにくいことが明らかになった。滞日期間が長い子どもほど、要求される受身・使役表現を使った表現文が増えてはいるが、滞日2年以降でも産出の伸びは小さく、6年以上日本にいても出にくい表現があった。ブラジル人児童は、半数以上が小学4年生以上の高学年であるが、それにもかかわらず低学年(小学1年生から3年生)の日本人児童のレベルまで追いついていない。特に、教科学習などで用いられるような使役表現の「非意志性」に分類されるものにおいて、ブラジル人児童が日本人児童のレベルに達していないことが明らかになった。

第6章では、これまでの調査結果を総括して、受身表現、使役表現の産出の難易差とその要因、教科学習との関わりから総合的考察を行い、今後の課題をまとめた。

本稿では自然発話場面では観察されにくい文法項目、受身・使役表現を、統制下で調査することによって引き出すことに成功した。それによって、どんな表現が産出されや

すく、産出されにくいかが明らかになった。従来、受身・使役表現は観察データの中に出現しないため習得されていないと考えられがちであったが、本稿の調査によって、これらの表現が回避されることが多いことや、途中まで出現（産出）されていても全体として間違った反応になってしまうため見落とされがちになることも明らかになった。限られた条件の中での結果ではあるが、本調査方法は観察されにくい項目を調査するための一つの可能性が示唆できたと思われる。

さらに、意図的な日本語教育を十分に受けられずに友達や先生との会話や教科学習など自然な環境の中で日本語を習得していくブラジル人児童にとって、受身表現、使役表現は産出が難しい文法項目であることが明らかになった。それは、滞日期間が長くなっても進歩は捗々しくない。これは日本人児童と比べて絵の内容を正確に描写するだけの日本語力が十分に身につけていないことや、教科学習の教科書などに登場するような受身・使役表現が理解できていないことを示唆するものである。また同時に、自然環境の中で日本語習得を任せるだけではブラジル人児童らの日本語、特に教科学習についていけるような日本語を伸長させることに繋がらないということも示唆している。